

都市公園の利用者による 評価等に関する研究

—— 船橋市内二公園の比較から ——

○小川 貫 齊藤虎征 菊地君男 阿部信博 朝倉徳雄 澤村 博

(日本 大 学)

都市公園 スペース 緑 自然

1. 調査・研究の目的

わが国における高度経済成長に伴う環境破壊は日常生活へも影響を及ぼし、生活空間としての総合的な人間の生活環境の整備や保全は立ち遅れているといわざるを得ない。

環境庁の調査では「校内暴力は緑地の少ない都市周辺に発生率が高い」とされ、東京農業大学造園地被・植栽学研究グループの実験によれば、「自然の緑が多いほど疲労の回復が早く、注意力や集中力が高い」という結果が出ている。さらに、神山は「森林浴は自律神経の働きを高める」として、「自然」と「緑」の必要性を強調している。過去の日本の都市には、「原っぱ」や「鎮守の森」、「屋敷の林」といった「自然」や「緑」が身近に存在していた。しかし、現在では、自然のある静的スペースやスポーツ・レクリエーション活動にも対応できるような動的スペースは著しく減少した。また、住民の価値感の変化や多様化の進む中で、コミュニティの形成の場としての多目的スペースも要求され、生活環境基盤施設として公園の需要はますます高まりつつある。

本研究は、現在の生活環境下に既存する公園施設の内容を分析し、その利用状況および利用者による評価について調査を実施し、公園の性格や利用者の期待などを把握することによって、主にスポーツ・レクリエーションの見地から公園施設のあり方に対する具体的提案の基礎資料を得ようとするものである。調査の対象とした公園は、それぞれ特徴を持った住区に設置された2公園を選んだ。いずれの公園も児童公園としての性格を持つものと思われる。

2. 公園の概況

(A公園)

名称 「夏見台中央公園」 図. 1, 2
所在地 千葉県船橋市夏見台4丁目
交通 船橋駅より新京成バス10分、徒歩 2分
設置年 昭和30年12月
面積 約 0.32ha
付帯設備 ベンチ12, ゴミ箱 6, 便所 1, 水のみ場 2, 鉄棒 2, ぶらんこ 6, すべり台 1, コイルトンネル 1, シーソー 2, チェーンジャングル 1, 砂場 1, 樹木 (数種) 約20

国鉄船橋駅の北方約 2.5kmに位置し、戸建住宅や小規模の商店などが混在する中心にある。当公園は、広さや施設の内容からみて児童公園といえるが、付近にはさらに小規

模の児童公園と「街かどスポーツ広場」が設置されている。

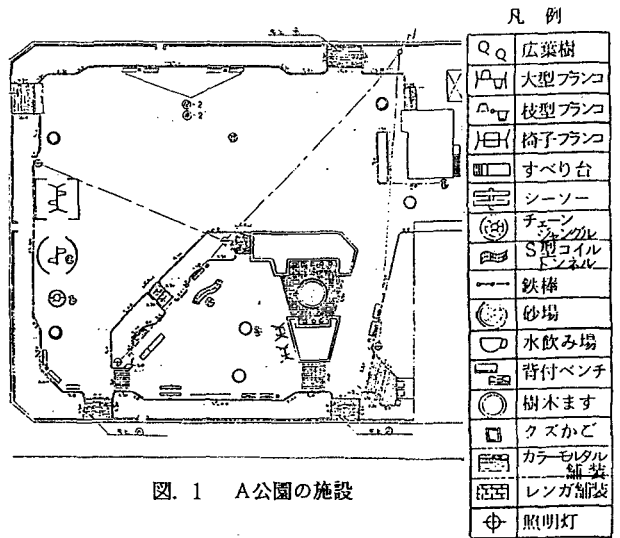


図. 1 A公園の施設

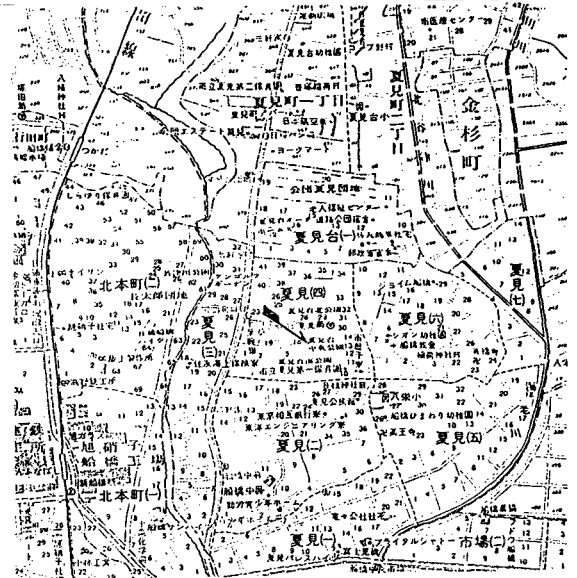


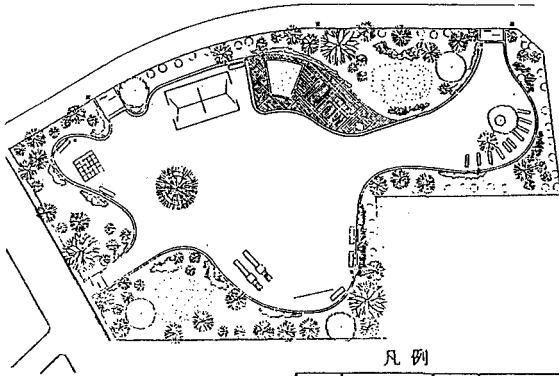
図. 2 A公園の周辺

(B公園)

名称 「海神二丁目公園」 図. 3, 4
所在地 千葉県船橋市海神町2丁目
交通 船橋駅より京成バス10分、徒歩 5分

設置年 昭和53年12月
 面積 約 0.21ha
 付帯設備 ベンチ 6, ゴミ箱 2, 鉄棒 2, ぶらんこ 2, すべり台 1, ドラム缶トンネル 10, ジャングルジム 1, 砂場 1, 樹木 (数種) 約20

国鉄船橋駅の西南西約 2kmに位置し、付近にはおよそ300世帯の高層住宅と戸建住宅がある。また、各種の中小会社の建物 (事務所, 工場, 倉庫) や工事・運搬用の駐車場が混在しているのでかなり雑然とした雰囲気であり、さらに隣接する道路の交通量も多く騒音が大きい。



凡例

	ブランコ		背付ベンチ
	すべり台		モルタル舗装
	鉄棒		ごみかご
	ジャンクルジム		砂場
	ドラムかん		水飲み場
	各種広葉樹		照明灯
	芝生		

図. 3 B公園の施設

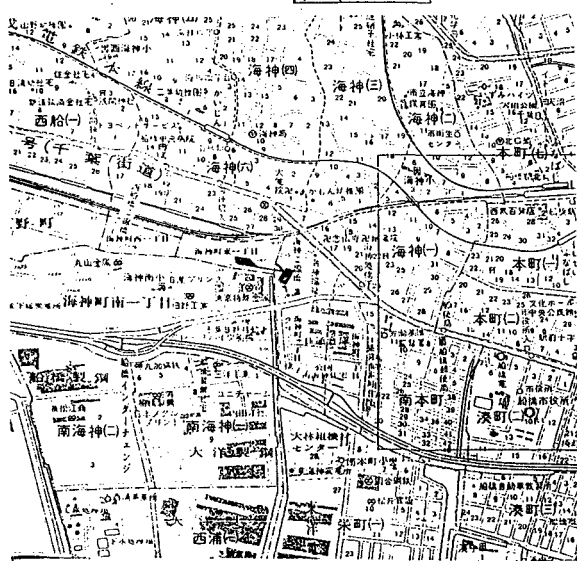


図. 4 B公園の周辺

3. 調査方法

- (1)調査日時
 - A公園 昭和60年10月10日 (祭), 10月20日 (日)
 - B公園 昭和60年 9月22日 (日), 10月10日 (祭)
 - ①午前 9時30分～正午 ②午後 1時～ 3時30分
- (2)観察調査: 出入り口からの入園者の行動を観察, 記録した。
- (3)アンケート調査: 13才以上の入園者を無作為に選び質問紙に回答を求めた。
- (4)アンケートの概要

(A) 利用者について

性別, 年齢, 職業, 住居, 交通手段, 住居から公園までの所要時間, 同伴者, 過去の利用回数, 来園の理由, 公園の混雑度, 公園に対するイメージ, 公園に対する期待, 実施したレクリエーション活動など。

(B) 利用者の公園に対する評価について

公園のスペース, 清潔さ, 樹木の数, 樹木の配列, 草花の種類, 草花の配列, 虫の種類, 虫の数, 鳥の種類, 鳥の数, 芝生のスペース, 芝生の状態, 遊具の種類, 遊具の数, 遊具の配列 (間隔), ベンチの数, ベンチのデザイン, ベンチのサイズ, ゴミの数, ゴミ箱の配列, ゴミ箱のデザイン, ゴミの処理状態, トイレの数, トイレの清潔さ, トイレの広さ, トイレの配色, トイレのデザイン, 出入り口の数, 出入り口の場所, 水道の数, 水道の配置, 公園全体の配置など。

(Bの設問に対しては, 「十分である」「不十分である」「どちらともいえない」の3つのスケールを設けて回答を得た。)

4. 結果と考察

表1は, 観察による性別および年齢層別入園者の概数を示したものである。年齢層の判別は, 観察者の主観的判断によった。

年齢層から見ると両公園とも小学生, 幼児が多く, 児童公園としての性格をうかがうことができる。A公園では中年層の男性の利用が比較的多くみられたが, これはA公園の周辺に商店とともに食堂なども点在し, 屋食後や仕事の合間の休息といった利用がみられたためである。また, 中・高校生の男子や青年の利用も多くみられたのは, A公園には, 待ち合わせの場所としてあるいは通りがかりにちょっと立ち寄るという都市公園の雰囲気があることを示していると思われる。B公園では, 近接する高層集合住宅の主婦層が, 子守りをしながら過ごしている姿が多くみられ, その他の年齢層の利用は少なかった。このように, 公園付

近の環境や後述する公園の性格などによって、利用する性別や年齢層にそれぞれ特徴があるといえる。

表. 1 観察による入園者の概要

(人数)

	A 公 園				B 公 園			
	男	女	計	%	男	女	計	%
幼 児	74	62	136	23.4	53	52	105	33.5
小 学 生	118	81	199	34.2	91	57	148	47.3
中 高 校 生	31	8	39	6.7	0	2	2	0.6
青 年	29	4	33	5.7	3	0	3	1.0
中年 (主婦を含む)	51	67	117	20.3	18	34	52	16.6
老 年	18	39	57	9.8	1	2	3	1.0
合 計	321	261	582		166	147	313	

(通り抜けを含まない)

表. 2 行動の観察

(人数)

	A 公 園			B 公 園		
	男	女	計	男	女	計
自転車乗り回し	74	33	107	31	21	52
ぶらんこ	91	142	233	39	65	104
コイルトンネル	12	15	27	-	-	-
ドラム缶	-	-	-	5	2	7
鉄棒	12	14	26	15	29	44
すべり台	24	26	50	44	49	93
シーソー	22	30	52	-	-	-
チェーンジャングル	17	17	34	-	-	-
ジャングルジム	-	-	-	38	27	65
サッカーボール遊び	49	0	49	29	5	34
野球・キャッチボール	65	2	67	26	0	26
バドミントン・テニス	13	6	19	0	0	0
なわとび	4	2	6	0	3	3
体操・ジョギング	1	2	3	0	0	0
かけっこ	34	27	61	12	9	21
砂遊び	47	29	76	30	28	58
その他の各種遊び	56	18	68	14	21	35
紙飛行機・竹とんぼ	7	0	7	4	0	4
子供のお守り	32	46	78	12	27	39
散歩	34	29	63	10	9	19
犬の散歩	9	9	18	1	1	2
ベンチで休む	80	74	154	9	7	16
談話	20	40	60	5	6	11
飲食	18	11	29	0	0	0
読書	3	4	7	0	1	1
植物採集	0	2	2	3	3	6
虫とり	0	0	0	3	2	5
あみ物	0	1	1	0	0	0
通り抜け	97	178	275	6	9	15

表 2 は、観察による入園者の主な行動内容を示したものである。A公園では、幼児のぶらんこ、小学生の自転車乗り回しなどの動的行動が目立つ反面、ベンチで休む、子供

のお守りといった中年層の静的行動も比較的多くみられた。また、「通り抜け」が多く、公園を生活道路の一部として利用するなど行動様式の多様さが観察された。

B公園では、ぶらんこ、すべり台、ジャングルジムのような遊具を使った動的行動が目立っているが、散歩やベンチで休むなどの静的行動が非常に少なかった。これは、公園の雰囲気あるいはオープンスペースなどの全体的なレイアウトについて一考を要するものと考えられる。例えば、ドラム缶トンネルなどの利用は極めて少なく、スペースを無駄にしているといわなければならない。

公園の評価に直接かわかることではないが、両公園に共通してぶらんこの利用が最も多かったが、その利用の仕方は、幼児期には男女の差はみられないのに対して学齢に達した年齢層では女の子の利用が増加し、男の子はより活動的なキャッチボールやサッカーボールを使った遊びを好む傾向が観察された。

観察によって在園時間をチェックした結果では、母親と子供の在園時間が一番長く、A公園で平均44分、B公園で30分であった。各年齢層でもA公園の在園時間が長く、全体の平均で約11分の差が認められた。このことは、前述した公園全体の雰囲気などの差が反映しているものと思われる。

表. 3 性別 (人数)

	男	女	計
A公園	20	32	52
B公園	9	33	42
合 計	29	65	94

表. 4 年 齢 (人数)

	13~20	21~30	31~40	41~50	51~
A公園	2	25	16	7	2
B公園	0	19	21	2	0
合 計	2	44	37	9	2

表. 5 住居の種類 (%)

	戸 建	高層集合	アパート
A公園	68	15	17
B公園	14	86	0

表 3~5 まではアンケート回答者の内訳である。性別では、A公園ではある程度男性の回答も得ることができたが、B公園では男性の回答は少なく、全体として女性からの回答が3分の2を占めた。

年齢別では、21~40才台の年齢層が全体の80%を超えており、やや偏った年齢構成となった。

住居は、A公園が戸建住宅街の中心にあること、B公園が高層の集合住宅に隣接していることを反映していると思われる。

次に、来園のための交通手段についてみると、A公園では徒歩(59%)、自転車(28%)、車・バイクなど(13%)と多少変化があるのに対して、B公園では100%徒歩による来園であった。これは、B公園でのアンケートの対象者の多くが主婦層であったことによると思われる。

徒歩での所要時間では、1~10分と答えた者がA公園の58%に対してB公園では88%あった。A公園では、11~20分および21分以上要した者もそれぞれ21%あったが、B公園ではすべての者が20分以内の来園者であり、近くの高層住宅に居住する人たちの利用率が群を抜いて高いことを示している。

同伴者は、A公園では家族が65%、次いでひとりで21%、友達13%、B公園でも、家族76%、ひとりで12%、友達5%とほとんど同様の結果であり、両公園とも家族づれの利用が主であることがわかる。

過去1ヶ月間における利用率についてみると、両公園とも10回以上と答えた者が半数を超えており、初めてと答えたのはA公園の13%だけであった。両公園ともかなりの頻度で利用されているといえる。

来園の理由について、該当する項目にいくつでも○印をつけさせる方法で回答を求めた結果、A公園では、広くて安全、近い、息抜き・休息などの項目が多く、B公園では、近いと答えた者が圧倒的に多く、さらに、子供の遊びと答えた者もかなりの数に達した。入園理由は公園の評価に関係する重要な要素と思われるが、A公園は多様な評価を受けており、B公園のように単に近いという入園理由では不十分のように思える。

公園の混雑度に対しては、「ちょうど良い」と答えた者がいずれも約8割に達しており、まずまず適度な混雑度であるといえる。

公園に対するイメージでは、A公園の回答者は広場、遊び・運動をあげており、B公園では緑、自然、花、あるいは静かさや空気のうつくしさをあげている。住環境や身近にある公園の違いによってイメージするものに変化があることがわかる。

公園に対する期待については、イメージの実現を望むのが当然であって、A公園では動的活動が安全に行える広々とした空間を期待し、B公園では自然の豊富な、清潔な環境、静かな雰囲気を楽しんでいる。比較的騒音の多い雑然とした環境にあるB公園周辺の住民が、安らぎの場として公園に期待するところは大きいと思われる。

実施したレクリエーション活動の種類をみると、両公園とも「子供のお守り」という回答が一番多かった。「子供のお守り」が母親にとってレクリエーションであるかどうか

は意見の分かれるところであろうが、義務観念にとらわれた行動としてではなく、より積極的に子供と活動するという意味でレクリエーションの一端としてとらえてもいいのではないかと考える。公園は、幼い子供たちの社会経験の場として重要な役割を果たしていることは明らかである。次いで、A公園では散歩のような比較的静的なものが多く、B公園ではかけっこ、おにごっこ、かくれんぼや遊具を使った遊びなど子供たちの活発な活動が目立った。

表. 6 A公園とB公園の評価の相違

項目	χ^2 の値	P
公園のスペース	12.532	***
公園の清潔さ	26.039	***
公園内の樹木の種類	5.617	*
公園内の樹木の数	12.236	***
公園内の樹木の配列	0.187	
公園内の花の種類	2.363	
公園内の花の数	1.142	
公園内の花の配列	0.291	
公園内の虫の種類	0.590	
公園内の虫の数	0.183	
公園内の鳥の種類	4.335	*
公園内の鳥の数	1.604	
公園内の芝生のスペース	1.664	
公園内の芝生の状態	0.015	
公園内の遊具の種類	9.849	**
公園内の遊具の数	10.177	**
公園内の遊具の配列(間隔)	4.325	*
公園内のベンチの数	2.809	
公園内のベンチのデザイン	6.115	*
公園内のベンチのサイズ	0.035	
ゴミ箱の数	5.889	*
ゴミ箱の配列	3.010	
ゴミ箱のデザイン	0.919	
ゴミの処理状態	5.349	*
トイレの数		
トイレの清潔さ		
トイレの建物の大きさ		
トイレの建物の配色		
トイレの建物のデザイン		
公園の出入り口の数	0.694	
公園の出入り口の場所	2.256	
公園内の水道の数		
公園内の水道の配置		
公園内全体の配置	0.009	

* P<.05 ** P<.01 *** P<.001

公園に対する評価の相違について χ^2 検定した結果が表6である。

公園のスペースについては、A公園とB公園で明らかに評価の相違がみられた。A公園では十分と答えた者が63%あったが、B公園では十分の17%に対して不十分と答えた者が40%に達した。しかし、B公園では、混雑度で「ちょ

うどよい」と答えた者が81%もあることから、スペースに対する評価は公園全体の面積ばかりではなく、オープンスペースのレイアウトによってもかなり影響を受けるものと思われる。すなわち、B公園においては、すべり台が広場の中央付近に設置されていることが全体に対して圧迫感を与えておりレイアウトの改善で評価も変わることも考えられるのである。設計者は、より年少者の利用を考慮したものであると思われるが、公園におけるオープンスペースの重要性を考えるならばレイアウトに一考の余地があるといえる。

公園の清潔さについては、十分と答えた者がA公園では37%、B公園では14%であった。これは満足できる状態ではないと思われるが、特にB公園では計画的な管理、整備の必要性がうかがえる。

公園内の樹木の種類（A公園の十分である60%に対してB公園33%）や樹木の数（A公園の十分である64%、B公園21%）でも差がみられたことは、樹木の種類や数が公園評価として重要なファクターであるといえることができる。しかし、両公園とも樹木の種類や数にほとんど差はなく、むしろ面積との対比でみるならばB公園の方が樹木の密度は濃いといえるにもかかわらずこのような評価を受けたのは、設置年数の長いA公園では樹齢の古い樹木が多く、うっそうとした緑の環境を現出しているからと思われる。

公園内の樹木の配列、花の種類や配列、虫や鳥の種類や数などの項目では、わずかに鳥の種類でB公園の評価が高かった程度で、特に相違は認められなかった。

芝生のスペース、状態についてもその評価に差はなかったが、両公園とも不十分という回答が70~80%を占めており、こうした面での整備が望まれるところである。

公園内の遊具については、種類、数、配列（間隔）などいずれの項目でもA公園の十分であるという回答が50%を超えたのに対して、B公園では、どちらともいえない、不十分であるを合わせるといずれも80%を超えている。これは、A公園にはB公園に設置されていないシーソーが2基設置されてあることや、ふらんこの利用者数に対する設置数（A公園 6に対してB公園 2）の差、10本のドラム缶の無駄などが起因するものと考えられる。

ゴミ箱やベンチの数、デザイン、サイズなどについては、ベンチのデザインでA公園（木製で座りやすい）では十分の回答が33%あり、B公園（プラスチック製で破損がある）では不十分の回答が39%あった。両公園とも、どちらともいえないの回答が40%以上あったことから、ひと工夫することによって高い評価が得られることも考えられる。ゴミ箱の数でも、A公園は50%の十分であるという回答を得ているが、B公園は、どちらともいえないと不十分を合わせて50%を超えている。

ゴミ箱の中のゴミの処理状態では、A公園（自治会による週1回の清掃）が十分であるの回答が18%、B公園（市

の管理により月1回の予定だが確認できない）では6%、不十分の回答はA公園で36%、B公園で75%あった。このことから、両公園ともゴミの処理に関しては十分満足のいく評価を得ているとはいえず、特にB公園での改善が望まれるところである。

トイレや水道については、一般的に評価の低い事項ではあるが、A公園に対する評価は「不十分である」という回答がいずれの項目でも60%を超えていた。B公園にはトイレの設備がないために評価の相違を検討することはできないが、水道の設備と掲示板は破損状態のままであり、いずれにしても高い評価が得られるとは思われない。トイレや水道の設備が整備されていないというのは、公園としての最低条件さえ満たしていないといえるし、また、たとえ設置されていても数やスペース、清掃などに対する配慮がなされなければ十分な評価は得ることができないと思われる。もちろん利用する側のマナーの悪さも指摘できることであり、利用者の公園に対する意識の改善も問題となろう。

出入口の場所や数、公園全体の配置などについてはいずれの公園でもある程度の評価があり差はみられなかった。

5. まとめ

本研究は、船橋市内のふたつの公園について施設の内容、利用状況および公園に対する評価を調査した。結果は次のようにまとめられる。

(1) 観察調査結果

- ①調査期間中の入園者の概数は、A公園で男性 321名、女性 261名、合計 582名、B公園では男性 166名、女性 147名、合計 313名であった。
- ②両公園とも、小学生、幼児の利用が最も多く、次いで、A公園では中年層の男性、B公園では主婦が多かった。大人の利用者に違いがみられたのは、公園付近の環境や公園の性格の相違によるものと思われる。
- ③A公園では各年齢層による行動の多様さがみられた。B公園では子供の遊具を使った動的な行動が目立った。
- ④両公園間で在園時間に差がみられ、平均で約11分A公園の方が長かった。

(2) アンケート調査結果

- ①来園のための交通手段、所要時間で明らかな違いがみられたが、これは、B公園でのアンケート回答者の多くが主婦であったことによるものと思われる。
- ②両公園とも家族での利用が多く、利用頻度では一ヶ月10回以上と答えた者がいずれも半数を超えた。
- ③来園理由は、A公園では広くて安全、近い、休息などが多く、B公園では近いと答えた者が最も多かった。
- ④公園に対するイメージ、期待では、A公園では動的活動が安全に行える広場を、B公園では、豊かな自然と

清潔で静かな雰囲気あげており、これは、回答者の住環境や公園の現況などが影響しているものと思われる。

⑤公園内での活動内容では両公園とも子供のお守りが最も多く、次いで、A公園では散歩のような比較的静的な行動が多いのに対して、B公園では遊具を使った子供の動的な活動が目立った。

⑥評価に相違がみられたのは、公園のスペース、清潔さ、樹木の数、遊具の種類や数などであり、A公園では比較的高い評価を得たのに対して、B公園では「不十分」とした回答が多かった。

以上、船橋市内のふたつの公園について、その施設の内容および利用者による評価を比較しながら検討を試みたが、今回はアンケートの回答者に偏りがある断定的な結論を導き出すまでは至らず結果を報告するに止まらざるを得なかった。今後、観察調査の徹底と質問内容の充実、対象者の選別などに検討を加え、さらに調査・研究を継続したいと考える。

参 考 文 献

- 1) 神山恵三著 「森の不思議」岩波新書 1983
- 2) アルバートJ. ラットン著 白井彦衛訳「公園の解剖」鹿島出版会 1981
- 3) ベンホイッター、ケネスブラウン 都市問題研究会訳「人間のための公園」鹿島出版会 1980
- 4) 田畑貞寿他「緑と住居環境」古今書院 1984
- 5) 日本公園緑地協会編「公園緑地」Vol 43 No.3 1982
44 No.3 1983
44 No.5 1984
45 No.5 1984
45 No.6 1985
- 6) 日本建築学会論文報告集 第 287号 1980
第 303号 1981
第 306号 1981
第 311号 1982
- 7) 福富久夫、石井 弘「緑の計画」地球社 1985
- 8) 松原治郎「余暇社会学」垣内出版 1977